

法華経とプラナー：対比の視点をうるために

伊原，照蓮

<https://doi.org/10.15017/2328607>

出版情報：哲學年報. 41, pp.23-41, 1982-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



法華經とプラーナ

——対比の視点をうるために——

伊 原 照 蓮

一、はじめに

ヴィンテルニツはその著『インド文学史』第二巻で、法華經とプラーナとの間に並行関係のあることを指摘して、大要次のようにいう。①過度の誇張、②特に經典の中でその經典を自讃すること、この二点は全ての大乗經典に持つ特色である。諸プラーナにとっての特色であるのと同様である。法華經の一行一行から思い起されるものは、プラーナの精神 (der Geist der Purāṇas) である⁽¹⁾。ここでかれが「プラーナの精神」といっているものが何を指すか、明確ではない。法華經とプラーナとの両者に共通の雰囲気を感じた筆者としては、その点をより明確な理解にもたらしめたい、と思うのであるが、両者を対比して類似点を挙げるのみでは、いまの場合不十分であろう。どのような観点から両者を対比するのが先ず問われなければならない。

この点について幸い、先学にすぐれた指摘がある。そこでこれらを紹介し、若干の検討を加え、法華經とプラーナとを比較する場合の視点をうることに小稿の意図である。

なおここでは法華經の中の、方便品第二から授学無学人記品第九まで、をとり上げる。初期（西暦五〇年頃ごろ）の成立と見なされているからである。またプラーナは、ヴィシュヌ・プラーナ⁽²⁾を主として依用する。

二、

右の意図を果たすために参照されるべき先学の研究の中、若干のものは既に紹介されている。^(四)そこでそれ以外のものを本稿ではとり上げることとする。

先ず吉田龍英氏はその著『法華経研究』^(五)第三篇法華経発達史の中で、インド文学と法華経との間に、直接的でなくとも何等かの関係があったことを考えさせられる、として次の諸点を挙げる。(イ)法華経の中の大乘經典自讃の長文は、マハーバーラタやラーマヤナ等と軌を一にする。マハーバーラタでは、「この生命ある聖典を読むものはあらゆる罪障消滅し、子孫も共に来世は天に昇る大益を得べし」としばしばいわれているし、ラーマヤナ第一節の終りに「バラモン族これを読めば学識と弁才とを得ることができ、クシャトリア族これを読めば国王となることができ、ヴァイシヤ族これを読めば商利を得ることができ、シュードラ族これを読誦するのを聞けば、向上の利益を得る。」と述べているからである。(ロ)法華経の中の、大通智勝如来の十六王子出家物語、日月燈明如来の八王子出家物語は、マハーバーラタの中に見える五王子の出家物語と、根柢を一にする。(ハ)父子関係、出生物語、莊嚴国土創造、等は純然たるプラーナ文学の系統であると。^(六)

右の中(イ)は、ヴィンテルニツも指摘しているところである。法華経においては確かに、經典自身を自讃している。例えば譬喩品第三の一〇六偈では次のようにいう。

「汝(舍利弗)が説いた時、誰かが『私は随喜します (anumodayāmi)』ということを口にし、またこの經典 (sūtra、法華経) を頭におしただくならば、そのひとこそ不退転の (avivartika) ひとと汝は思うべし。^(七)」

このように、法華経に随喜し、この經典を頭におしただくひとは、不退転のひと、とされるが、これに反して、法華経を誹謗し (kṣipitva)、比丘たちに対して苛酷な行為 (kṛhiṇi) をなすひとはさまざまな果報を受ける。例えば、

阿鼻地獄 (avīci) に落ち、更に転生しては、畜生に生れ、みじめな生活を送る。その生活がいかにみじめであるか、が事ここまかに描かれている。(以上、譬喩品、一一三偈より一三五偈まで)。誹謗の罪の強調は、自讃の裏返しとすることができよう。これに対比さるべき、マハーバーラタやラーマヤーナの文は、既に吉田氏の示すところであるが、ヴィシュヌ・プラーナにおいても、その末尾において、ヴィシュヌ・プラーナ聴聞 (śaṁśṛavāṇa) の効果がさまざまに説かれている。

「これ (＝ parāśara 仙が説いたプラーナ) を聞けば、全ての過失 (dosa) より生ずる、罪 (pāpa) の集積は償われる。」 (8, 12c-d)

「馬祠祭 (asvamedha) の終りに水浴するひとが獲得する果報 (phala)、その全てを、これ (＝ ヴィシュヌ・プラーナ) を聞けば得るのである。上人 (＝ matreya) よ。」 (8, 28)

「禁欲をなしているひと (kṛta-upavāsa) が、これ (＝ ヴィシュヌ・プラーナ) を聞けば、直ちに、アグニホートラ祭 (agni-hotra) を一年間実行した時に得られる果報、それを獲得するのである。」 (8, 29c-d, 30a-b)

ヴィシュヌ・プラーナを聴聞すれば、全ての罪は償われ、馬祠祭を行った時と等しい果報、アグニホートラ祭を一年間執行した際と同等の果報が得られる、というのである。これは經典の自讃といってよい。ここに、法華経と叙事詩・プラーナとの間の共通点を見出すことができる。吉田氏の挙げる他の二点 (上掲②と③) も示唆に富む指摘であるが、より具体的な検討が望まれる。

三

次に、ラモット (É. Lamotte) はその大著『インド仏教史 (Histoire du Bouddhisme Indien.)』の中で、シュンガ王朝下の仏教はヴィシュヌ派 (vaiṣṇava) と多くの共通点を有する、という。ラモットの所論の大綱は次の如く

である。シュンガ王朝の開祖 *pusyamitra* 王（紀元前一八七—一五一）は、その前のマウルヤ王朝の最後の王 *brhadratha* 王を襲つてその権力を奪い、旧体制に忠誠を誓っていた、隣国ヴィダルバ（*vidarbha*）の王 *yajñasena* から解放されたかれは、この成功を祝つて二回馬祠祭を挙行した。平和は恢復され、プシュヤミトラ王は、旧來のヴェーダの祭式を尊重し、バラモンたちの支持を受けて國を統治した。このプシュヤミトラ王が仏教徒に好意的でなかったことは確実である。しかしかれが仏教徒を迫害したという点については、それ程確実ではない。⁽¹⁰⁾ 但し仏教の中には、プシュヤミトラ王を仏教の迫害者とする傳承がある、としてラモットは、大毘婆娑論第二百二十五、*Divya-avataṇa* 等から五個所の關係文章を挙げる。⁽¹¹⁾

次いでラモットは、節を改めて、⁽¹²⁾ ヴィシュヌ信仰の隆盛によつて仏教に危難が及んだことを述べる。いま必要と思はれる箇所を筆者の理解に従つて記してみると次の如くである。

マトゥラーの附近で生れた英雄クリシュナ (*kṛṣṇa*) は後に、古代からの神格ヴィシュヌと同一視せられるに至つた。英雄クリシュナの父はヴァースデーヴァ (*vasudeva*) とよばれ、従つてクリシュナは時にヴァースデーヴァと称せられる。またクリシュナはナーラーヤナ (*nārāyaṇa*) ともいわれる。このクリシュナ・ヴァースデーヴァ、或はナーラーヤナは更にバガヴァット (*bhagavat* 神) とも同一視せられる。それ故この神格の信奉者たちは、バーガヴァタ派 (*bhāgavata*) と呼称せられるのである。⁽¹³⁾

いまシュンガ王朝に眼を転ずると、このバーガヴァタ派と關係のある王名が眼につく。シュンガ王朝第九代の王は、*bhāgavata* (或は *bhāga*) という名前を有するし、シュンガ王朝を継ぐカーンヴァ (*kāṇva*) 王朝の初代はヴァースデーヴァ (*vasudeva*)、また同朝の第三代はナーラーヤナとよばれるからである。

シュンガ王朝興起の頃⁽¹⁴⁾には、ヴィシュヌ信仰は既に中インドに及んでいた。マウルヤ王朝下に首都パータリプトラ

に駐在した大使メガステネースは、クリシュナがマトウラー附近のひとびとによって信仰されていたことを傳えているからである。またラクノウ博物館のバララーマ (balarama) 像、カルカタ博物館のヘラクレス像、等は右のことを傍証する。^(一六)

シュンガ王朝初代の pūṣyamitra と同時代の文典家パタンジャリ (paṭanjali) は、その著大注釈書 (mahabhāṣya) の中で、ヴィシシュヌ信仰にしばしば言及している。

(1) 「saṅkarsana を伴えるクリシュナ」という表現を含む詩句をパタンジャリは引用している。^(一七)
 (2) 「これに反し、anārdana は第四番目に外ならない。」という句をパタンジャリは挙げる。^(一八) クリシュナは、親縁関係にある saṅkarsana, pradyumna, aniruddha と共に一族をなすが、^(一九) 右の句は、クリシュナを中心としたかかるグループを暗示している。

(3) ラーマ (balarāma か saṃkarsana) とケーシャヴァ (keśava) (即ち kṛṣṇa-viṣṇu) との神殿において音楽劇が上演されていたことを、パタンジャリの挙げる用例からわれわれは知ることができる。^(二〇)

(4) ヴァースデーヴァによる悪王 kamsa の殺害を演ずる俳優及び劇が、かれの時代に存したことをパタンジャリは記している。^(二一)

またシュンガ王朝の時代に、ヴィシシュヌ信仰は、その発祥の地 vidisa 及び mathura にとどまることなく、インド東海岸地方及びデカン高原にまで及んでいた。このことは各種の碑文より知ることができる。

(1) シュンガ王朝第五代の王 bhāgabhadra の治世の第十四年に、ギリシヤ人ヘリオドローソスは、タキシラ (taxila) の王安タリキタ (antalkita = antialcidas、凡そ紀元前一二五—一〇〇) によって、シュンガ王の宮廷に大使として派遣された。このヘリオドローソスは、バーガヴァタ派の信者であり、vidisa (現在の desnagar) に、ヴァースデーヴァ神 (ヴィシシュヌ神) のための記念柱を建てた。この柱はその頭部には garuda 鳥をいただき、またそこには、ヴァ

アースデーヴァ神を「諸神中の最高神 (devadeva)」とし、不死の三原則 (trini amutapadāni) — 自制 dama と捨離 tyāga と勤勉 apramāda — が大切であることがしるされている。⁽¹¹¹⁾

(2) シュンガ王朝第九代の王 bhāga (或は bhāgavata) の治世の第十二年に、一人のバーガヴァタ派の信者

(gotami の息子) は、常に vidisa に在って、ヴァースデーヴァの大神殿の近くに、第二の garuda 柱を建てた。

(3) 右より少し後に、ghasundi (rajpūta 地方の chitorgarh 地区) において、供養石板の囲い壁 (pūjāśīla-prākāra) が建てられているが、そこにも samkarsana 及び vāsudeva のため、ということがしるされている。⁽¹¹²⁾

(4) マトッラーの大総督 (satrap) śodāsa — 恐らくはサカ族の王 azilises (紀元前一〇年 — 紀元後五年) と同時代人 — の治下において、mora (マトッラー郊外) において石板神殿 (śaladevagrha) の中に、聖なる vīṣṇu 族の五英雄の像 (bhagavatāṃ vīṣṇuṇāṃ pañcaviraṇāṃ pratimāḥ) が建てられた。このヴィシュヌの五英雄とは、明らかに baladeva, akṛūra, anādhrīti, śāraṇa, viduratha に関係がある。⁽¹¹³⁾ とラモットはいう。

(5) 右と同じ時代に同一地方において、ヴァースデーヴァ神の大神殿が建てられ、その中に、vasu というひとによって塔門 (torāṇa) と欄楯 (vedikā) が作られた。これは、これらを奉獻することによってヴァースデーヴァ神が憐みをいだき、大総督 śodāsa に恵みを示されるように願って、である。⁽¹¹⁴⁾

(6) 北部 maharāṣṭra 地方の nānāghat にある大窟院には碑文が残っているが、それでは、王妃 nāyanikā — デカン王 śatakarni 一世 (凡そ紀元前二七〇年 — 一七〇年) の妃 — が、indra と varuṇa というヴェーダの神と並んで、samkarsana と vāsudeva とを挙げて、祈願している。⁽¹¹⁵⁾

さて、上述のヴィシュヌ派の信者たち、また時代を等しくしヴィシュヌ信仰に言及している文典家パタンジャリはヴィシュヌ派で説く徳目に通じていた、とみることが出来る。ヘリオドローソスの建てた garuda 柱には、自制 dama と捨離 tyāga と勤勉 apramāda の三徳目がしるされていることは既に述べた。この三徳目の重要性はマハーバーラ

タの中でも強調されている。即ち、

「自制 (dāna) と捨離 (tyāga) と勤勉 (apramāda)。不死 (amṛta) は、これらの中に包まれている。賢明なるバラモンたちは、これらを真実への門 (satyamukha) とす。」(五、四三、一四)^(七)
これらの徳目は、ブラフマンの世界に行くための駿馬にも譬えられる。

「勇気 (vikrama) も、財産 (artha) も、友人 (mitra) も、善人 (suhṛjana) も、堅固に制御された自己 (ātman) のようには、苦から解放することはない。」(一一、七、一八)

「それ故に、徳行 (śīla) を守ってから、同情 (maitra) に赴くべし。バラタ族のひと (dhṛtarāṣṭra 王) よ。自制 (dāna) と捨離 (tyāga) と勤勉 (apramāda) との、これら三つは、ブラフマンへの駿馬である。」(同上、一九)
「徳行に綱で結びつけられた車——心の——に乗ったひとは、死の恐怖を捨てて、ブラフマンの世界に行く。王よ。」(同上、二〇)^(八)

Bhagavadgītā (16, 1-3) にも多数の徳目が挙げられているが、自制 dāna と捨離 tyāga はその中にも含まれている。以上によって紀元前二世紀には、ヴィシュヌ派の道徳的教説が広く知られていたことをうかがい知ることができる。更にラモットは次のようにいう。紀元前二世紀のバーガヴァタ派のひとびとはヴィシュヌの四現相 (vyūha) 説を知らないことはないようだ。というのは、マハーバーラタ第十二巻では、四現相説の素材ともいうべき思想が散説されているからである。即ち、^(九)先ずヴァースデーヴァからサンカルシヤナ以下が創出されることを述べていう。

「私は独りで知 (vidyā) を伴って、(世界を) 放散させる。ユディシュティラ王よ。それから更に、私は全世界を知によってここに作り出す。」(二二、三二六、六七)

「われらの、第四番目の形 (mūrti) (= vāsudeva) は、不変のシェーシャ (śeṣa) を放出した。かれ(＝シェーシャ)は、サンカルシヤナと呼ばれる。かれ(サンカルシヤナ)は、プラデュムナを生んだ。」(同上、六八)

「プラデムナから私アニルツダが（生じた）。私の創出（sarga）は繰り返し繰り返し（行われるの）である。アニルツダから同様にブラフマンが（生じた）。（ブラフマンは）そこ（アニルツダ）における第一の蓮華より生じた。」（同上、六九）

「ブラフマンから、一切の存在物——動くもの及び不動のもの——が（生じた）。劫（kalpa）の始めにおいて繰り返えされる、かかる創出（srsti）を汝は知れ。」（同上、七〇）⁽¹⁰⁾

ここでは、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラデムナ→アニルツダ→ブラフマン、という創出の順序が語られているわけである。

同じく第十二巻の別の箇所では、ハリ神が、時に一現相（eka-vyūha）を、時に二現相（dvi-vyūha）を、時に三現相（tri-vyūha）を、また時に四現相（catuṣ-vyūha）を、⁽¹¹⁾とることを説いている。

「またかかる（古来の）法の知——行為とよく結合し、不殺生の法を伴った（知）——によって自在なるハリ神は喜ぶ。」（一二、三三六、五二）

「（ハリ神は）一現相に分類されることあり、或る時には二現相の名前でよばれることあり、また三現相として数え上げられることあり、また四現相が認められることがある。」（同上、五三）⁽¹²⁾

また同じく第十二巻の他の箇所では、サンカルシャナ以下が占める役割——宇宙の規模における——を述べて次のようにいう。

「かの唯一のプルシャ、即ち永遠のヴァースデーヴァ、以外には、世界には常住な存在——不動のもの、動くものを含めて——は存しない。偉大な力を有するヴァースデーヴァは全存在の本体となっているものだからである。」

（一二、三二六、三二）

「地（pṛthivī）、風（vāyu）、虚空（ākāśa）、水（ap）、及び第五番目の火（jyotiḥ）。これらが集合したもの

が、偉大者の《身体 sarīra》と名付けられるのである。」(同上、三二)

「(上記五種の)要素の集合 (dhātu-saṃghāta) なしには、身体は全く成り立たない。また靈魂 (jīva) なしには、バラモンよ、諸要素が推進力となることはない。」(同上、三四)

「その靈魂 (jīva) は、シェーシャ (śeṣa)、或はサンカルシヤナとよばれる主 (prabhu) なのである。その靈魂は、従って、それ自体の行為によっては、サナトゥクマラー (saṅat-kumārā) となりうるのである。」(同上、三五)

「また宇宙破滅の時に、全存在が還滅するところ、それは全存在の意 (mānas) であり、プラデムナと広くいわれている。」(同上、三六)

「それから、不動のもの、動くものを含む、一切世界が生ずる、元のものが、その意から生れる。(そこに生れたものは) 行為者、結果、原因である。その意から生れたものがアニルダである。かれは支配者であり、全ての行為において顕現しているものである。」(同上、三七)

「知田 (kṣetrājñā) であり、グナ (guṇa) より成らない、尊者ヴァースデーヴァ、かれこそは、靈魂 (jīva) であり、尊者サンカルシヤナという主 (prabhu) である、と知らるべきである。」(同上、三八)

「またサンカルシヤナから、意 (manas) となるものが生ずる。かれはプラデムナといわれる。プラデムナから生じたアニルダ、かれは我慢 (āhankāra) なる大自在者である。」(同上、三九)

「私から、不動のもの、動くもの、不滅のもの (akṣara)、滅するもの、存在するもの、非存在のもの、を含む全世界が生ずるのである。ナーラダよ。」(同上、四〇)⁽ⁱⁱⁱ⁾

ここで述べていることは次の如くである。ヴァースデーヴァは全存在の本体であり、知田 (kṣetrājñā) であり、グナ (guṇa) 所成ではない。その身体 (sarīra) は、地・風・虚空・水・火の要素の集合より成る。身体が推進力とな

るためには、その身体に靈魂 (īra) がなければならぬ。全存在には意 (manas) が存在する。その意から我慢 (ahankāra) が生ずる。ここでいう靈魂はサンカルシャナであり、意はブラデムナであり、我慢はアニルツダであると。⁽ⁱⁱⁱ⁾

以上マハーバータ第十二巻に散説されている、四現相説に関係ある箇所を訳出して示した。ここでは、ヴァースデーヴァから始まる創出 (sarga) の順序が先ず語られ、その中第二のサンカルシャナは靈魂 (īra) であり、第三のブラデムナは意 (manas) であり、第四のアニルツダは我慢 (ahankāra) である、とするのである。また現相 (vyūha) の語が用いられていることも上述の通りである。

ところでサンカルシャナ以下は、本来は英雄クリシュナの一族の名前に外ならない。^(iv)英雄クリシュナがヴァースデーヴァと同一視せられるに及んで、サンカルシャナ以下もまた、宇宙創造の経過の中に位置づけられるに至った。そういう過程を経て、現相 (vyūha) 説が成立するに至ったということができよう。マハーバータでは、四現相説がまとまった形で説かれているわけではないが、その素材ともなるべき考えが、上述の如くほぼ出揃っているとみることが出来る。

以上のような状況をふまえた上で、ラモットは、紀元前二世紀のバーガヴァタ派で四現相説が知られていたであろう、というのである。この推測は我々を首肯せしめるように思われる。

次いでラモットは、ヴィシュヌ信仰の特色を挙げて大要次の如くいう。上記のような、クリシュナの一族である諸英雄は、ヴィシュヌ神と同一視せられ、先ずその部族のひとびとから、次いでヴィシュヌ派の信者たちから、その愛着の対象とされる。この愛着はやがて全き献身 (bhakti) へと発展する。バーガヴァタ信仰の達人は、専念して、自己自身の中に神的存在を発見するために、外界から遠ざかる。神と魂との一致、全存在の中に自己を見出す、また自己の中に全存在を見出す、という仕方努力をする。その場合、Yoga は欠くべからざる手段であるが、しかし Yoga

が唯一の救済手段であるのではない。神、いまの場合ヴィシュヌ神、はその思恵 (prasāda) によって信者を助ける。神は絶えず世界のために働き、危険が切迫した時には、動物・人間・英雄・神に化身してひとびとを助ける。その化身 (avatāra) は、数は決定できないが、主要なものとしては十種が挙げられる。その十種の中には、マトウラー生れの、ヤーダヴァ (yādava) 族のクリシュナも含まれていると。

以上ラモットの叙述に従ってシュンガ王朝のヴィシュヌ信仰の状況を述べた。確かにその時代にヴィシュヌ信仰がかなり隆盛であり、神殿も建てられ、有力な信者もあり、道徳説、教理が整えられてきていることは、既に述べたところからうかがい知ることができよう。

さて以上のようなヴィシュヌ信仰に対して仏教はどういう態度をとったか。この点に関してラモットは、大別して次の二点を指摘する。

A、ヴィシュヌ信仰のような有神論は無益であり、むしろ危険である、とする態度である。仏教は無我説であるからこの点から、有神論を破する、というようなことも後には行われる。

B、理論的な面では、上記のように、仏教とヴィシュヌ信仰とは相対立するのであるが、にも拘わらず、両者の間にはよき隣人の関係が存する。両宗教の間には多数の共通点がある。

右の中、Aは小稿の目的にいま直ちには関係がないので、ここでは省略する。^(三五)次にBに関してラモットの挙げる例は次の如くである。

先ず *ahimsa* が両宗教において共に重視されている。

次にヴィシュヌ信仰の方でいう *avatāra* の教理は、仏教の方の過去諸仏の觀念の中に、その複本を見出すことができる。この過去諸仏の觀念とは、例えば次の經典に認められるが如きものである。^(三六)*Mahāpadāna Sutta* では過去

七仏についていう。

過去九十一劫 (kappa) の時に毘婆尸 (vipassī) 尊者が世に出現した。過去三十一劫の時に尸棄 (sikhī) 尊者が世に出現した。その同じ第三十一劫の時に毘舍婆 (vessabhū) 尊者が世に出現した。この現在の賢劫 (bhadda-kappa) において拘樓孫 (kakusandha) 尊者が世に出現した。この同じ賢劫において拘那含 (konāgamana) 尊者が世に出現した。この同じ賢劫において迦葉 (kassapa) 尊者が世に出現した。私がいま世に生れて等正覺を成じたのも、正しく同じ賢劫においてであると。

次いでこれら七尊者それぞれについて、種姓 (jāti, social rank)、姓 (gotra, family)、その時代の人壽、その下で覺りを開いた樹木の名前、各尊者の二大弟子の名前、父母の名、誕生地等が述べられる。^(三六)

右はこの Suttanta の最初の部分であるが、ここに見られるような過去仏は Bhāhūt と Sañci の古い彫刻にも示されている。^(三七)

ラモットは更に続いている。ヴィシシュヌ信仰の聖地マトゥラーには大衆部 (mahāsaṅghika) が紀元前に存在したことは Mathurā Lion Capital の銘文^(三八)より知ることができる。この大衆部の中の有力な一派、説出世部^(四〇) (lokottara-vādin) が、仏陀の超越性を強調したことは周知の通りである。Saurasena 或は avanti 地方において、バーガヴァタ派の信者たちがそれぞれ好みの神格に対して献身的信仰を捧げていた。説出世部の主張がこのような信仰の風土によって少くとも促進せられたと考えられ、その意味でヴィシシュヌ派の教理の影響を無視することはできないと。

引き続きラモットは、インドの有神論が大乗仏教徒の上に及ぼした影響について指摘する。

法華経では、仏陀は全ての有情に対して公平無私に同一の配慮を表わすが、かかる仏陀は、バガヴァッド・ギーター (九、二九) に示されているナーラーヤナ (nārāyaṇa) の兄弟である。^(四一) また法華経では、仏陀の活動のさまざまな現われを、非常にしばしば vyūha という語でよんでいる。^(四二) これは、ヴィシシュヌ信仰との関わりがあったことの徴候

である。^(四三)

以上が、法華經とヴィシュヌ信仰との關係について、ラモットの指摘するところである。

四、おわりに

以上両先学の見解について述べた。この中ラモットの指摘するところはいまの場合重要である。紀元前後にはマトゥラーを中心としたかなり広い範圍にわたってヴィシュヌ信仰が盛んであったことを、かれの示すところによってわれわれは知ることができる。法華經も、少くともその第九品までは、ほぼ同時代の成立と見なされていることは既に述べた。また筆者の依用するヴィシュヌ・プラナーはヴィシュヌ教徒にとっての聖典であり、初期のプラナー文献の一つと目されるものである。さらに、初期のプラナーは、紀元一世紀には存在したにちがいない、とされている。^(四四)法華經とプラナー——特にヴィシュヌ・プラナー——の間には、共通の信仰の土壌、共通の宗教的風土を予想することが可能である。このことは、法華經とヴィシュヌ・プラナーとの間の共通点、類似点を探ねる場合、大切な視点を与えてくれる。

注

- (一) M. Winternitz, *Geschichte der indischen Literatur*. Bd. 2, 235—6.
この箇所は、金倉博士によって既に指摘されている。
- 金倉圓照博士「インド文化と法華經の交渉(序説)」(『法華經の思想と文化』所収)二二頁以下参照。
- (二) 横超慧日博士『法華經序説』(法藏館 七二頁以下。田村芳朗博士『法華經』(中公新書)四三頁以下。
- (三) *Vishnupurāṇa, with the commentary of Śrīdharaśvāmī*. Calcutta, 1882.
(英訳) H. H. Wilson, *The Vishnu Purāṇa*. 3rd edition, Calcutta, 1961.
- (四) 金倉博士「上掲論文」にはデュルヌフ、ケルン両碩学の見解が詳細に、且批判を加えながら、紹介されている。

- (五) 吉田龍英氏『法華經研究』青梧堂、昭和十六年。本書は、中村瑞隆博士の御好意によって、知ることができた。記して謝意を表する。
- (六) 吉田氏は、この外、ケルンの指摘（法華經と Bhagavadgīta との類似）を紹介している（全書一九四頁以下）が、これは金倉博士がより正確に紹介しているところである。注（一）に示した論文をみよ。
- (七) サンスクリット・テキストはケルン・南條本による。
- (八) śrute 'smin sarvadoṣa-uttha-pāpa-rāsiḥ praśāmyati // (8, 12 c-d)
yad-aśvamedha-avabṛṭthe snātaḥ prāpnoti vai phalam /
sakalam tad-avāpnoti śrutiṣv-etan-munisattama // (8, 28)
kṛta-upavāsah prāpnoti tad-asya śravaṇa-antarah /
yad-agnihote subhute varṣena-āpnoti vai phalam // (8, 29 c-d, 30 a-b)
- (九) N.N. Ghosh, Did Puṣyamitra Śuṅga persecute the Buddhists?, B.C. Law Volume, I, Calcutta, 1945.
右の論文では、この問題が検討されているところである。H. Raychaudhuri も、仏教の迫害と云う傳説には反対している。金倉博士『印度中世精神史 中』五頁、註（三）を参照。
- (一〇) ラモットの挙げる資料は、(1) 大毘婆娑論百二十五 (2) Diya-avadana (3) 舍利弗問經 (4) Mañjuśrīmūlakapa (5) ターラナータ仏敎史、からの關係箇所である。この中、(1)(2)(3)は、山田龍城博士によって詳細に検討されている。『大乘佛敎成立論序説』五三三頁以下。
- (一一) Histoire, p. 431 ff.
- (一二) バガヴァタ派については、辻直四郎博士『バガヴァッド・ギーター』（インド古典叢書、講談社）三二五頁以下を参看せよ。
- (一三) シュンガ王朝興起は紀元前二世紀前半。金倉博士、上掲書（注九参照）一頁をみよ。
- (一四) 辻博士、上掲書（注一二参照）三一九頁をみよ。
- (一五) 強力なるラーマ、の意。かれは時にヴィシヌの第八の化身とせられる。
- (一六) Histoire, p. 432.
- (一七) asidvriṇyo 'nusaśara paṇḍavam /

「劍を持って、かれはパーンダヴァを追跡した。

これらの偈の出所不明。

ななsamkarsanaは時にクリシュナの兄とせられる。PW. samkarsanaの頭をみよ。

(1) janārdanas-tv-ātmacaturtha eva/ (ad 6, 3, 5 ; Kielhorn's edition.3. p.143.)

janardana は「ひとびとを刺戟する者、困惑させる者」の意味で、ヴィシュヌ、或はクリシュナの別名(PW. janardana の項)。

なお、ヴィシュヌ・プラナーナにおいては janardana は、一切の支配者ハリ神 (viśveśvaro hariṁ) が劫末 (kalpānta) に全存在 (akṣiabhūta) を食いつくす (bhaksayati) 時の相とされている。世界創造 (vistiṁ) の時には、ハリ神はブラフマンとなり、創造された世界を保護する時には、ハリ神はヴィシュヌとなるのである。

Vishṇupurāṇa. op.cit., p.20-21. Wilson. op.cit., p.18.

(一九) *samkarsaṇa* は時にクリシュナの兄とされることは上述した。注(一七)参照。*pradyumna* は時にクリシュナの子、或は時に *samkarsana* の子とされる。*aniruddha* は *pradyumna* の子とされる。

なおマハーバーラタ第十二巻では、この samkarsaṇa 等について次のように説く。即ち最高神 vāsudeva (＝ヴィシュヌ) から samkarsaṇa が、samkarsaṇa から pradyumna が、pradyumna から aniruddha が、aniruddha よりブラフマンが生ずる。坂井尚夫教授『宗教』5、『印度』500頁参照せよ。

(110) mṛdāṅga-śāṅkha-tūṇavaṇ pṛthāṇ-nadanti saṃsadi prāśade dhanapati-rāma-kesavāṇām / (ad 2, 2, 34 ;
Kielhorn's edition, 1. p. 435-436)

「Kudera とラーマとケーシヤヴァとの神彫における集会において太鼓とは貝と笛とが個別に演奏される。」
右の語句の出典不明。J. A. F. Roodbergen, *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*. (op. cit., p. 208)

(11) varttika 6 ad 3, 1, 26. の箇所では、*patanjanī* は *kaṇṇavadham-ācāṣe kaṇṇsaṇ ghatayati* / *balibandham-ācāṣe balim bandhayati* の例を挙げる。この例文は次のような意味である。即ち、物語り (*ākhyāna*) を述べる動詞

が causative form を用いる時は、その意味は「それを物語る。」と云々を表わす。従つて、*kamsam ghātayati* / (悪王 *kamsa* を殺害すること) と云う表現は、*kamsayadham-acaste* / (悪王 *kamsa* の殺害をかれは物語る) と云うことを表わす。*balim bandhayati* / (*bali* を捕縛すること) と云う表現の場合も同様である。

更に *vāritika* 15 (ad 3, 1, 26) の箇所では、*kamsa* の殺害及び *bali* の捕縛が、俳優 (*sobhanika*) によつて演ぜられ、また絵画 (*citra*) に描かれたことと云々をわがわがの表現がある。辻博士、上掲書 (注二二参照) 三二〇頁をみよ。

- (二二) ヌスナガルの *garuda pillar* と云うのは、金倉博士『中世精神史』中九頁、及び辻博士『ベガヴァッド・ギーター』(上掲) 三二〇頁参照。なお E.J. Rapson, *The Cambridge History of India*, Vol. I, plate XVIII. 参照。

ヌスナガルの石柱銘文は中村元博士「佛教隆盛時代におけるヒンドゥー信仰の実情」(鈴木學術財団、研究年報、一五、一九七八、三五頁)に挙げられている。またこの銘文と関係のある、仏教の『ダンマパダ』のうちの句も全論文に示されてゐる。

- (二三) この碑文は、その書体からみて、今よりも紀元前二百年のものであり、従つてまた *patanjali* 以前である。

R.G. Bhandarkar, *Vaiṣṇavism, Śaivism and minor religious systems*, §. 3.

- (二四) 通説では *baladeva* はクリシュナの兄、*akṛura* はクリシュナの父方の叔父、*anādiṣṭi* はクリシュナの属すること、*yādava* 族の將軍 *ugrasena* の息子、*sāraṇa* はクリシュナの兄弟、*viduratha* は *viṣṇu* 族の或るひと (*Viṣṇu-purāṇa*, op. cit., p. 348. 以下同様) *bhaja* *māna* の息子) を指す、と云はれる。

- (二五) この刻銘と云うのは、中村博士「上掲論文」(三六頁)に於いて、原文が示され、検討が加えられてゐる。

- (二六) Bhandarkar, op. cit., p. 4.

- (二七) *damaś-tyāgo* 'pramādaś-ca eśv-amaṭam-āhitaṃ/
tāni satyanukhāny-āhur-brāhmaṇā ye manīṣiṇaḥ' // (5, 43, 14) (Poona edition)
P. Deussen, *Vier Philosophische Texte des Mahābhārata*, S. 13.

- (二八) *na vikramo na ca-apy-arho na mitram na suhrijaṇaḥ/
tathā-unmoceyate duḥkhād-yathā-ātmā sthiraśāmyamaḥ* // (11, 7, 18)
*tasmān-maitram samāsthāya śīlam-āpadya bhārata/
damaś-tyāgo* 'pramādaś-ca te trayo brahmaṇo hayāḥ' // (op. cit., 19)

śīla-rāśmi-samāyukte sthito yo mānase rathe/
 rakṭvā mṛtyu-bhayaṃ rājan-brahmalokaṃ sa gacchati // (op. cit., 20) (Poonas edition)
 P. Ch. Roy, *The Mahābhārata*, Vol. VII, p. 32.

(二九) 但し、ペーバーラタは全体として、前二世紀—後二世紀の成立とされ、その中で、いまの第十二巻は、pseudo epic であることが知られる通り、新らしい部分に属することは留意しておく必要がある。金倉博士『印度中世精神史』三〇一頁、及び三〇二頁の注(四)参照。

(三〇) ekakī vidyayā sārḍhaṃ viharīṣye dvija-uttama/
 tato bhūyo jagat-sarvaṃ kariṣyāmi-īha vidyayā // (12, 326, 67)

asman-mūrtiś-caturthī yā sā-asṛjaś-cheṣaṇ-avyayaṃ/
 sa hi saṃkaraṣaṇaḥ proktaḥ pradyumnanaḥ so 'pyajījanat // (op. cit., 68)
 pradyumnad-aniruddho 'haṃ sargo mama punaḥ punaḥ/
 aniruddhāt-tathā brahmā tatra-ādikamala-udbhavaḥ // (op. cit., 69)

brahmaṇaḥ sarvabhūtāni carāṇi sthāvarāṇi ca/
 ekaṃ sṛṣṭiṃ vijānīhi kalpadisu punaḥ punaḥ // (op. cit., 70)
 上記に添くられつつは、saṃkaraṣaṇa 以下の創造については、坂井教授によって既に紹介されている。注(二九)参照。
 また、ペーラーマンが蓮華生である点については、塚本啓祥博士「蓮華生・蓮華座の源流と展開」(『法華經の思想と基盤』所収、昭和五十五年二月)を参照。

(三二) dharma-jñānena ca-eteṇa suprayuktena karmaṇā/
 ahiṃsā-dharma-yuktena priyate harir-iśvaraḥ // (12, 336, 52)
 eka-vyūha-vibhāgo vā kvacid-dvi-vyūha-saṃjñitah/
 tri-vyūhaś-ca-api saṃkhyātāś-catur-vyūhaś-ca dīśyate // (op. cit., 53)

注釈によれば、一現相とはヴァースデーヴァの相をとって創出を行うことであり、二現相とはヴァースデーヴァ、サンカルシャナの相をとって創出を行うことであり、三現相とは、ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラデムナの相をとって創出することであり、四現相とは、これに更にアニルダダが加わって、四神の相をとって創出を実行することである。

- (三四) 注(一九)をみよ。
- (三五) Histoire. pp.434-6.
- (三六) The Digha Nikāya. xiv. (vol.II, p.157.) 長阿含經第一、大本經(大正藏、一、一頁以下)。なお、この經には中野本があり、E. Waldschmidt にて出版されている。
- Das Mahāvadānasūtra. T. I: Einführung und Sanskrit-Text.
T. II: Textbearbeitung. Berlin, Akademie-Verlag 1953, 1956.
- (三七) Dialogues of the Buddha. part II. p. 6-7. にこれらが表示されている。
- (三八) 但し、過去仏の信仰は阿育王以前にできた。千鴻龍祥博士『改訂増補 本生経類の思想史的研究』昭和五十三年、山喜房、五〇頁参照。
- (三九) Sten Konov, Kharoṣṭhī Inscriptions. XL. なお静谷正雄氏『小乗仏教史の研究』昭和五十三年、百華苑、六〇頁参照
- (四〇) 大衆部という名称と、説出世部との関係について、静谷氏、上掲書、五三頁以下をみよ。
- (四一) ここに挙げられている gīṭā の文と、法華経(薬草喻品の三草二木の譬喩に見られる、如来の公平無私)との類似は、既に Kern によって指摘されている。金倉博士「インド文化と法華経の交渉(序説)」(上掲)一八頁参看。
- (四二) p. 117. f. 2; p. 146. f. 12; p. 209. f. 1; p. 219. f. 4; etc.
- (四三) ラモットはこの後、大乘の三身説にも言及している。
- (四四) 中野義昭博士訳『叙事詩とプラナーナ』二二七頁。(この部分は英訳による。)